

「日本風景街道」の活動のさらなる活性化策を検討する有識者懇談会（委員長・石田東生筑波大学名誉教授）がこのほど、国土交通省でスタートした。今夏に打ち出される予定の新たな理念や方針に、関係者の関心が寄せられている。第2ステージへ入ってなお進化する「道の駅」との連携強化も、大きな検討課題とされている。

風景街道は、道路と沿道や周辺地域を舞台に、市町村、商工団体、NPOなどが地域ぐるみで協働し、景観、自然歴史、文化などの地域資源や個性を生かした、美しい国土景観をつくり、地域活性化や観光振興を推進する活動だ。アメリカで活発な「シーニックバイウェイ」を参考に、北海道の市民活動グループで



園児も菜の花の種まきに参加し、美しい景観の形成に取り組む（渥美半島菜の花浪漫街道ルート＝愛知県）



穴道湖の夕日を楽しむオープンカフェで地域活性化に取り組む（人間文化の原風景～ご縁をつなぐ神仏の通ひ路ルート＝島根県）

取り入れた同様の試みが好評だったことから、学識者による「日本風景街道戦略会議」（委員長・奥田碩日本経団連名誉会長）を国交省が設け、同会議が平成19年、国内での制度化を提言。同年9月から全国93ルートで活動を開始し、現在、141ルートが登録されている。同省が今回、改めて有識者懇談会を設けたのは、制度化

から10年間経って社会の動向もいろいろ変化し、関連政策も動き出しているため、これまでの活動成果や課題などを検討し、今後の望ましいあり方を探るのが目的だ。

活動団体（風景街道パートナーシップ）へのアンケートに基づき同省の説明によると、「美しい国土景観の形成」の活動分野では植栽・花植（活動実施57団体。複数回答、以下同じ）、清掃（52）、建物・施設等の保全・維持管理（19）などソフト面が主で、案内看板の設置（27）、ビューポイントの整備（15）などハード面は少ない。「地域活性化」分野ではイベントの開催（70）が多いが、地域資源の調査（25）、オリジナル商品の企画・販売（18）、シンポジウム・会議・研修会等の開催・参加（16）など、ルートの特徴を生かした収益事業も含め、積極的な取り組みが目立つ。

このため懇談会では、市民レベルの活動だけでハード面の整備を進めるのは限界がある、と行政の関与強化を求め、地域の声も多しことや、「美しい国土景観の形成」など、三つの活動分野を有機的につなぐ仕組みができていないことが課題だとして、風景街道を今後どのように活用し、盛り上げていくかを、早急に検討することを申し合わせた。

道の駅「いたこ」：風景街道「いたこあやめ花街道」 元名城大学大学院教授 小濱哲



ロゴマークはコンノジュンコさんが手がけ、日本の象徴富士山をモチーフに歴史や文化が道路を介して未来へと続いていくことへの願いをこめて表現した。

水郷潮来のバスターミナルの近くに道の駅「いたこ」はある。開設から15年、リニューアルが進む。大きなガラスの四角錐の天井が目を見張る。レストランでは、近隣の婦人が手料理を出すのが特徴だ。この地域は政府の方針で八郎潟と同じく、干拓による大規模な水田開発が行われた。関東きつての田園地帯で、早場米も有名だ。

アヤメの花と株を維持するため、昔ながらの作業着で切り花



水郷の充足感を共有



アヤメは3年ごとに植え替える。地力回復を図る。地域住民が参加する。

商工会の会員も年々減少しています」との答え。そうではないだろう。商業基盤がしっかりしていると、目に見える商品が多いことや商店が建ち並ぶことではない。人を思いやる、約束を守る、物を大切に扱う、そうした精神が人々の間に染みこんでいるのだ。これは昨日今日、真似してできることではない。数百年続く生活習慣がそれを当たり前のことにし、何の意識もなく自然に言葉の端々に、あるいは何気ない動作や振る舞いに出ているのだ。ホスピタリティ、思いや

きつと、人の目と靴を見て、その人が信用できるかどうか瞬時に判断する特技を養ってきたに違いない。地域ではアヤメ園のことで悩んでいた。年間の維持経費が4000万円以上かかるという。「安いもんじゃ」と言い切る古者。人さえ集まってくれば、チャンスは必ずある。それがたとえ10年先でも、絶対に機会を見逃さないという自信と、そのための行動力を感じた。だから「目先の利益に惑わされるな。商売には我慢がつきものなのだ」と言いたかったのだと思つた。

全国植樹祭、福島県の津波被災地で

森林や緑化に対する国民的理解を深めるため両陛下がご臨席して毎年開催されている「全国植樹祭」第69回大会は今年6月10日、東日本大震災の津波被害を受け復興中の、福島県南相馬市の海岸防災林を会場に行われる。復興に向けて力強く歩み続ける県民らの姿と、内外から寄せられた大きな支援に感謝する気持ちを広く発信するのが狙いだ。1万人以上が参加し、両陛下のお手植え、お手まきのほか、参加者代表らによる記念植樹、平成29年度学校関係緑化コンクールの優秀校表彰などがある。

「植木のまち、道の駅でガーデンフェス

昨年度オープンした新潟県三条市の道の駅「庭園の郷 保内」(TEL.0256-38-7276 http://honai-gardens.com/)は4月27日から5月6日まで、周辺の保内公園・熱帯植物園、37造園業者の実施するオープンガーデンと連携して「保内ガーデンフェス2018春」を開催する。日本3大植木生産地の一つとして江戸時代からの伝統ある保内地区の緑化産業や緑の環境を生かした観光・交流促進が目的。多彩な花苗をそろえた同駅庭園生活館での寄せ植え体験、花や植木の特価販売のほか、公園などでの樹齢250年の五葉松や、専門家解説付きオープンガーデンめぐりなどが呼び物になっている。

「これは農業基盤も商業基盤もしっかりしたところですね」と地元住民に問いかけた。「商業は見る影もないですよ。」「ここは農業基盤も商業基盤もしっかりしたところですね」と地元住民に問いかけた。

新しい地域の魅力づくりは、新しいものを創造することではなく、既にある人々の活動に観光的な付加価値を見だし、それを告知し誘導していくことにある。地域の人々が自分の生活の中で快適性や利便性を高めようとする活動に参画し、共に汗を流すことで得られる充足感を共有する。自分たちの郷土を良くしていこうとする活動そのものが観光資源にもなる。潮来には、そんな日常的な活動が潜在している。道の駅「いたこ」は、風景街道「いたこあやめ花街道」ルートの近くにある。